

# 豊農会 90周年・NAFIC 10周年 記念式典、記念講演、祝賀会を開催しました

# きずな

令和8年3月発行

令和8年1月24日（土）、NAFIC附属セミナーハウスにおいて開催いたしました。

## 記念式典 13時～14時

### 開会ご挨拶 豊農会 中尾 義永 会長



本日は、豊農会90周年・NAFIC10周年の記念式典を開催させていただきましたところ、このように多くの方々にご参集いただき感謝に堪えません。また、福谷副知事はじめ公私お忙しい中ご臨席

いただきました来賓の皆様にも、日ごろのご支援を含め改めて御礼申し上げます。さらに、本日欠席であっても多くの方々よりご寄付をいただきました。皆様の母校に対する熱い思いを感じられる沢山のご寄付をいただきました。有り難うございます。さらに今式典の開催の為、通常業務のある中献身的にご準備いただいた事務局の皆様にも重ねて御礼申し上げます。

さて、昨日、衆議院が解散され、各党の党首の皆さんの政策公約についてのインタビューを拝見しましたが、食料自給による安全保障について語る方が皆無であったのが少し残念でした。

私事ですが農大を卒業した40年前に「キリング・フィールド」という映画を見ました。ポルポト派が勢力を増し、アメリカが撤退しだしたカンボジアの姿を描いた映画でした。その中で、田植えの準備をしているところにいきなり迫撃弾が落ちてきて、いったんは逃げるのですが、すぐに田んぼに戻って作業をする農民の姿がありました。「あっ、これが農業だ」と感じました。国が戦争状態だろうと、大きな災害が起きようとも、どこかで誰かが種を播き農業を営んでいる。この日本でも、いつからコメが栽培されてきたのか定かではありませんが、数千年の間、恐らく一年も休まずに作ってきました。ただ作るだけではなく、品種改良して発展させてきました。この継続性こそが農業の本当の力だと思います。しかし近年は、採算重視で農業をすぐにあきらめてしまう。ここNAFICが農業の継続性の大切さと採算の取れる夢のある農業、その先の食材の可能性を余すことなく引き出す、そんな学習の場であり続けることを望んでいます。最後に、次の100周年、20周年に向けて本日ご参集の皆様のご支援・ご協力をお願いしてご挨拶とさせていただきます。

### 記念式典ご祝辞 奈良県知事 山下 真 様（ご代読） 福谷 健夫副知事



本日は豊農会設立90周年記念式典が、歴代の卒業生の皆様、また、関係者の皆様にご参集され、かくも盛大に開催されますこと、まことにおめでとうございませう。関係者の皆様には平素より本県の農業振興をはじめ、県政の推進にご理解とご協力を賜っておりますことに、あらためて御礼申し上げます。また本日は、なら食と農の魅力創造国際大学校（NAFIC）が前身の奈良県農業大学校から再編後10周年を迎えることができました。このことも皆様のご支援の賜物であろうと重ねて御礼申し上げます。

昭和9年、豊農塾が設立されて以来、県としては、時代の変化に合わせ幾度もの変遷を重ねながら、一貫して奈良県農業を支える人材の育成に取り組んでまいりました。さらに、農の振興はもとより、奈良の食の振興を図るため、平成28年（2016年）に、「なら食と農の魅力創造国際大学校（NAFIC）」を開校し、新たにフードクリエイティブ学科を設置いたしました。従来のアグリマネジメント学科とともに、「食」と「農」双方の担い手を育成する体制を整え、今年で開校10年目を迎える。今後も、「食」と「農」それぞれの業界を支える人材養成機関として、重要な役割を果たしてまいりたいと考えております。

この間、卒業生・修了生は2,120名を数え、現在、豊農会は1,649名の皆さまの結集により組織していただいております。豊農会には、就農や独立開業されている会員をはじめ、関連業界で活躍されている多数の会員がおられるとお聞きしております。こうした皆さまのご支援・ご協力によって本校は支えられているとあらためて認識させていただいたところです。

県では、「奈良県豊かな食と農の振興に関する条例」に基づき、食とそれを支える農に関する各種施策を総合的かつ計画的に推進するため、令和3年4月1日に「奈良県豊かな食と農の振興計画」を策定いたしました。施策の基本方向として、「奈良の食の魅力づくり」「食を通じた健康増進と子どもの健全育成」「戦略的な販売の推進」「生産振興」の4つの目標を掲げております。このうち、「奈良の食の魅力づくり」では「食の担い手」の育成を、「生産振興」では「農の担い手の育成」を目指し、具体的な施策を展開してきたところであります。令和7年度末に第1期計画が終期を迎えるにあたり、変化する情勢を踏まえ、内容を見直した第2期計画の策定を本年4月に予定しており、より一層、奈良県の食と農の振興を進めてまいり所存であります。

結びに、本県の「食」と「農」の振興に向けて今後ともご尽力いただきますようお願いするとともに、豊農会の益々のご発展をご祈念し、あわせて本日の参加者の皆様のご健勝をご祈念申し上げ祝辞といたします。本日は誠にありがとうございます。

### 記念式典ご祝辞 一般社団法人奈良県農業会議 松谷 幸和 会長

豊農会90周年・NAFIC10周年誠にありがとうございます。

また日頃は奈良県農業会議の事業推進に対しご協力を賜り誠にありがとうございます。

豊農会様にあつては、昭和9年に豊農塾が私塾として開かれて以降、この間、その後の県立への移管を経て、修練農場、経営伝習農場、農業大学校、そして現在の奈良県立なら食と農の魅力創造国際大学校に至るまで、修了者の同窓会組織として、90年の長きに渡り、奈良県の農業の担い手、また近年は食の担い手、さらに幅広くそれぞれの業界を支える多数の人材を、強いきずなのもとに結集してきていただいたことに深く敬意を表します。

全国に先駆けて、川上すなわち農家と、川下すなわち料理人を統合して実学教育を進めて来られ、めでたく10周年の節目を迎えられました。

農業会議としては、本県の農業委員会ネットワーク機構として、農地の利用集積、遊休農地の解消、新規参入の促進等の諸課題解決を推進するために、ここにおられる会員のみなさまへの支援、また会員のみなさまとの連携・協力は不可欠と認識しております。とりわけ、新規就農者の育成と確保に向けて、関係者相互の連携を密にし、就農希望者に向けて就農計画の作成や知識・技術の習得にはじまり、資金・農地の確保等就農に向けた支援を行って参る所存です。

また、ここにお集まりの多くの会員のみなさまをはじめ、既に本県農業の中核を占めておられる方々に対しても、関係者相互の連携を密にし、簿記や青色申告、販路開拓等農業経営の向上を図るための支援、さらには、農業法人化に向けて必要な支援を行って参る所存です。

結びに、会員のみなさまへの本県農業振興への一層のご尽力を期待し、また会の発展と参加者全員のご健勝をご祈念申し上げます。



# 豊農会 90周年・NAFIC 10周年

## 記念講演 14時～15時20分

### 「淘汰の時代の農業を考える」

講師 久松農園(株) 久松 達央 代表

#### 1. 自己紹介

私は非農家出身。父はエンジニアでサラリーマンの転勤族だった。1998年に150万円を元手に茨城県土浦市で農業を始めた。現在、多品目生産のいわば「巨大な家庭菜園」を経営。6.5haの畑全て露地栽培、ビニルハウスはない。個人向け90%、飲食向け10%で直販。個人顧客は約350人、宅配数が年間約1万個。

自分が美味しいと思う物を届けるというコンセプトで、季節感のある品物を詰め合わせて「どや顔でお届け」している。

#### 2. 日本の農業を取り巻く状況

##### ① 深刻な人口減少とマーケットの縮小

世界の人口を見ると、中国は3年前から減少、インドも3年以内に減少に転じる。ベトナムはあと20年程度で減少。アフリカは増加中。日本は人口減少。3大都市圏に6割の人が住む状況。奈良県も同じく減少している。県外流出している。東京、埼玉、千葉、愛知、福岡以外は減少、特に10～20代の女性が減少。今、「地方」は、女性がいない。つまり女性の仕事がない。転出超過。こうなると、次世代には、資産も全て都会へ流出してしまう。

私の地元茨城県では、農業従事者のうち、20代～30代では、3人に1人が外国人。アジアを中心とした外国人実習生なしでは成り立たない。ところが、これからアジアの人口は激減して、若年労働力を「輸出」する余地はほぼなくなるだろう。

日本の2100年の人口は、下位推計で3,700万人、現在のポーランド、アフガニスタン並、上位推計で6,000万人、現在のイタリア並になると推計されている。こうなると、日本語のマーケットが小さくなる、日本語でアクセスできる対象が縮小、カネ、モノ、情報が集まらなくなってしまう。

##### ② サステナビリティの欠如とインフラの老朽化

肥料、飼料については、ロシアのウクライナ侵攻、コロナ禍が海外へ依存する日本の産業の危うさを露呈した。

農業保護の国際比較に用いられるPSEという数値が、日本では、農業産出額9.1兆円の47%となっている。1万円稼ぐのに5千円の補助金が必要な産業が果たして自立しているといえるのか？農業は他産業に依存できなくなったら、タカるところがなくなったら、どうなる？かじるスネがなくなれば終わり。

日本では高度経済成長期に一気に国内インフラを整備した。それから50年以上がたちインフラの老朽化は著しい。すごい勢いでダメになっている。2030年には既存のインフラにしかお金（税金）が使えない状態になるといわれている。インフラの取捨選択が必要となる。

##### ③ 産業の構造変化、二極化の加速

現在の日本の農地は半分が明治以降に作られたもの。それ以前からあった残り半分のうち、8割は江戸時代以降のもの、室町以降が2割といわれている。2200年には室町時代並みの人口となる。つまりその頃には、農地は現在の10分の1以下で十分足りる。さらに、1人あたりのコメ消費は減少する一方で、面積あたりのコメ収量は増えている。条件不利地の農地、特に水田は産業政策としてはオワコン化するだろう。

特にここ10年、日本では農業の産業化・集約化が一気に進んでいる感がある。2025年農林業センサスでは、農業経営体数というのは、10年前に比べると約半分。140万経営体が、80万経営体まで少なくなっている。2020年には0.7%の農家が売上の3割を占めるようになった。さらに2025年の試算では、2%の農家が売上5割を占め、集約化が進んでいる。売上1千万円未満は10%。今後、全ての農家を残すことは不可能。大淘汰時代となる。いわば撤退戦を戦っている状態。この豊農会は、百周年にはどうなっているのでしょうか？

一方で、食の外部化により、2040年には、加工品8割、生鮮2割の販売となる予想にもかかわらず、業務、加工需要にあわせた対応ができていない。相変わらず勝手に作って勝手に市場へ持って行く「プッシュ型」でやっている。逆に販売計画、生産計画に応じてサプライチェーンを構築するのがプル型。工業はプル型。農業も、そういう大きなフードサプライチェーンの中での1つのコマとして、でかくなっていくというのが現在の農業経営の大規模化の傾向である。そういう意味で、サプライチェーンを目指す、食と農を同時に教えるコンセプトのこちらの大学校はまさに時代に合ったものといえる **(次頁続く)**。

#### 講師プロフィール：

株式会社久松農園代表。1970年茨城県生まれ。1994年慶応義塾大学経済学部卒業後、帝人株式会社を経て、1998年に茨城県土浦市で脱サラ就農。年間70種類以上の野菜を有機栽培し、個人消費者や飲食店に直接販売している。補助金や大組織に頼らずに、地域にある資源を活用した自立・自走の「小さくて強い農業」を標榜する。長年の夢だった、下水汚泥の農業利用プロジェクトを進行中。他農場の経営サポートや自治体と連携した人材育成も行っている。著書に『農家はもっと減っていい』（光文社）、『キレイゴトぬきの農業論』（新潮新書）、『小さくて強い農業をつくる』（晶文社）



**(前頁続き)** 農業はモジュール化（生産技術とノウハウがパッケージとして購入できるようになること）をしていく。モジュール化により計画生産が可能となった時代に、なぜ従来どおりのプッシュ型である必要があるのか？例えばトラクターの自動操舵システムである。これは強者が生き残るシステム。中山間でドローンを飛ばす農業も然り。違う戦い方をしないと生き残れない。テクノロジーというのは、今存在している全てのプレーヤーにとって福音となるものではないことを肝に銘じて欲しい。農業法人のサラダボウルを例にとる。モジュールを実装し、資本力、マネジメント力で戦っている。

プレーヤーの選別と選択投資により、スケールメリットがより大きくなる時代となった。強いところはより強くなる。スケールメリットを発揮できないところでは、違う戦い方をしなければならない。

農業生産は二極化が進む。売上5千万円以上の層が7～8割となったとき、残りの2～3割を担うのは誰か？1千万円以下の層は消えていく。それはある種、飲食業で言う、個人でやっているカフェみたいなもの。そういうものがあったとしてもよいが、自分でちゃんとマーケットも作って、自分で競合を排除してやる必要がある。そういう農家に、全体の何割かは行かざるをえないというのが二極化の中身。

そんなことが起こるわけがないという人のために実例を二つ。

戦後の農地解放により、最も農地を減らした農家は山形県庄内の本間家。ピーク時の所有農地は3千ha、農地解放の前でも1,750ha持っていた。つまり、日本で大規模化が起きないというのはウソである。

ワインの生産はヨーロッパから、新世界とよばれるカリフォルニア、チリ、南アなどに移った。機械化できない傾斜地に比べ、平坦地で大規模化していった。対抗するため、ヨーロッパの旧産地は、高価格帯に絞り込んでテロワール（風土性）を抱えて生き残っている。

日本の全てを取り揃えたフルセット型の農業はどこまで保つのか？他国は「選択」と「集中」で戦っている。

ただし経験から申し上げて、農業を産業化した国のメシは不味い！またそのような国では、農産物の輸出は味の分からない奴らに対して行うものと位置づけられている。日本人には到底受け入れられないだろう。そういう意味で、日本は、よくも悪くも極端な産業化には向かない繊細な国であると思う。二極化が綺麗には進まないだろう、中途半端な構造変化となるだろうと予測している。

### 3. 生き残るための「弱者の戦略」

日本の農家は、HOWは言うが、WHYは言わないと研修生から指摘され、はっとした。われわれは、なぜ農業をするのかの正当性を、ただ農家に生まれたということにのみ求めているのではないか。果たして、社会の中でどのような役割を果たすかを根本から考えているのか、重い課題である。

モジュール化の時代にあって、生き残る道は、①大きく勝ちに行く→これは全ての人には出来ないやり方②市場への適応→マーケティングは他に任せる③個性に振り切る→グローバルマーケットとは切り離して細く長く続けることを目指す、ただし、③においては、惨めな範囲を逸脱しない（身の丈にあわせる）こと！

サプライチェーンの歯車になるのか、サプライチェーンを遠ざけるか（ファンベースをとるか）のどちらか。小さいプレーヤー＝適正規模に徹するという考えが極めて大事。どこまでやるか、どれ以上やらないかの判断が大事。本当の顧客は誰なのかということ、私も考え、皆さんも考えなきゃいけないと思う。

そして、地域の持つ意味が変わってきていることに気付くこと。地域＝地理的に近い、ではない。どのコミュニティに属するか、どこに信頼できる仲間がいるのかが大切となる時代となっている。

例えば、強者は、経営資源が十分にあるので、仮に野菜の鮮度、物量、コミュニケーション、価格、安定供給性という5つの要素があったとすると、全部をやろうとする。しかし、小さい農業はそれやっても勝てないから得意なところに特化する。すなわち、「弱者の経営戦略」、強みに絞る、弱みを捨てるのが小さくて強い農業に一番大事な要素。私は偏る勇気だと思っている。「潰し」が効かなくするということである。

有機農業の話も少しさせていただく。私なりの言葉で言うと、地域にあるもの、入手できるもので作るということ。有機農産物がそうではない農産物より、機能性が高いこともない、栄養価が高いわけでもない、安全なわけでもない。違いは、有機的に作る＝資源循環を考慮して作れば地域の物質の循環がちゃんと担保されるということである。今の有機JAS法というのは、下水由来の肥料の利用を認めていない、地域で作っているものを利用することを何ら求めていない時点で、私にとっては全く循環型の農業ではないと考えている。例えば、日本の下水に含まれている、ただ捨てられているリンの総量は、日本の輸入肥料に含まれるリンの総量より多い。この宝の山を活用せずして何が有機農業か、と考えている。

### 4. 結び：「農家の最大の敵は、今の農家が社会に必要だと信じて疑っていないこと」

私は、農家の最大の敵は、今の農家が社会に必要だと信じて疑っていないことだと思っている。ヨーロッパの古いことわざで、悪党の最後の隠れ蓑は愛国心というのがある。私は、農家の最後の隠れ蓑は食料安保じゃないかと思っている。

食料安保が大事、国内で食料がつかれるようにしておくことは大事であるが、さっき申し上げたように集約が済んでいる中では、1軒の米農家で、50年前の100軒の米農家と同じ生産量を担保できてしまう。そのときに、残りの99軒は、食料安保論を盾に存在意義を問えない。米があればいいんだったら大規模化に勝てない。違うロジックを持ってこない駄目なんじゃないか。

現在のような、経済の縮小局面では、難しいことであるが、世界中の人が日本を見ている。我々の隣の中国は、10倍の人口規模を抱えて、30何年間一人っ子政策を続けた。日本よりシャープに少子化が進行していく。中国も同じ問題を10年後ぐらいに抱える。私たちが少子化の最先端を行っているなかで、農業に関しては、何をどうしていくのか、このインフラをどうしていくのかということに答えを出さないと、これから後に続く他の国たちが困る。最先端の、非常に難しいけれど、取り組みに値する課題だと思っている。



# 豊農会 90周年・NAFIC 10周年

## 祝賀会 16時20分～18時20分



西川清JA中央会専務理事  
乾杯ご発声



祝賀会のようす



学生ビデオメッセージ  
上映

## 令和7年度 NAFIC 行事報告

### NAFIC祭

令和7年10月25日(土)に開催しました。今年度は芋掘り体験以外の催しを全てメイン会場の安倍校舎に集約して行いました。



安倍校舎会場  
(手前がアグリエリア、奥がフードエリア)



農産物の販売



プチ料理教室



卒業生のお店



パンツエロッチェとポタージュ

### 東海近畿学生スポーツ大会

令和7年5月29日(木)～30日(金)に岐阜県(岐阜メモリアルセンター)において開催されました。

種目	成績
テニス	女子ダブルス優勝
卓球	女子ダブルス2位
卓球	男子ダブルス3位
野球	3位



# 令和7年度 NAFIC 行事報告

## アグリマネジメント学科公開講座

令和7年12月5日に開催しました。約100名の参加がありました。

「農産物直売所出荷に適した野菜の品種と栽培方法」と題し、株式会社大和農園事業本部本部長の内田さんにご講演いただきました。

また、「農産物直売所出荷のための病害虫対策」と題し、奈良県病害虫防除所の井村所長にご講演いただきました。



株式会社大和農園事業本部 内田本部長



奈良県病害虫防除所 井村所長

## フードクリエイティブ学科公開講座

令和8年1月26日に、令和7年4月に開業した「AUBERGE de SENVIE（オーベルジュ・ドゥ・サンヴィ）」の浦辺大（ひろし）シェフをお招きして、「「地産地消」を大切に 奈良の風土と歴史をフレンチに」と題した講演会を開催しました。



浦辺 大シェフ



パテ・アン・クルート



学生と記念写真

## 意見発表・プロジェクト発表会開催

学生が日頃の学習成果を披露し、相互に研鑽を積むことを目的に、1年生は意見発表会、2年生はプロジェクト発表会を実施しました。アグリマネジメント学科では、東海・近畿ブロック予選を兼ねており、丸山さん（2年生）、西川さん（1年生）が和歌山県で行われた大会に出場しました。



フードクリエイティブ学科  
(2年生成果発表会)  
令和7年12月17日



アグリマネジメント学科  
(2年生成果発表会)  
令和8年1月31日



東海近畿ブロックの大会で発表する  
丸山さん(左)・西川さん(右)  
(令和8年1月16日)



## 「食と農をつなぐ朝ごはんコンテスト 2025」で入賞

フードクリエイティブ学科2年生のチーム2組が、近畿農政局及び大阪ガスネットワーク主催の「食と農をつなぐ朝ごはんコンテスト 2025」に参加しました。

チーム「NAFICデュオ・デリス」が1次審査を通過し、令和8年1月17日に8チームで開催された実演審査に臨み、「大阪ガスネットワーク賞」を受賞しました。



ミルクおむすびとスペイン風オムレツ（和風）  
・パピヨット仕立て



受賞者  
(NAFICデュオ・デリス)

## 食材活用ワーキング

令和7年11月～12月にかけて、両学科合同の授業として「食材活用ワーキング」を実施しました。アグリマネジメント学科の学生が栽培した食材を用いて、フードクリエイティブ学科の学生とともにメニューを考案し、調理を行うなど、交流を深めました。



調理中の両学科学生



柿プリン・ナラ・モード



完成した料理とともに

お問合せは 各学科までお願いします。豊農会90周年・NAFIC10周年記念冊子の残部が若干ございますので、ご入り用の方は下記まで。

フードクリエイティブ学科  
食・研修係 ☎0744-46-9700

アグリマネジメント学科  
農・研修係 ☎0744-47-3430